

## 養成校における保育指導案作成に関する研究

### －「ねらい」と「内容」に着目して－

林 理恵 (園田学園女子大学 短期大学部)

向井 妙子 (園田学園女子大学 短期大学部)

森 晴美 (神戸海星女子学院大学)

保育指導計画を構想し、実践していく力は保育者に求められる資質能力の一つである。その力を育てるために、養成校ではどのように保育指導案作成指導が行われているかを幼児の部分実習指導案(教育の側面)作成について、「ねらい」と「内容」に着目し、保育者養成に携わる教員へのインタビュー調査、アンケート調査を行った。その結果、全ての養成校が「ねらい」欄のある保育指導案を使用し、85%以上の教員が「ねらい」を「心情・意欲・態度」と指導していた。しかし、「内容」については記入欄のない保育指導案を使用している養成校もあった。指導内容も「主な活動」「心の動き」「子どもが経験すること」等それぞれの教員の解釈による指導がなされていることが推察された。また、保育指導案作成指導において、「ねらい」の指導は重視しているが、「内容」の指導には重きが置かれていないことが明らかになった。これらのことから、「内容」の捉え方、「ねらい」と「内容」の関連について、検討する余地があるのではないかと考える。

キーワード：指導計画・構想・作成指導・ねらい・内容

### I 問題と目的

新教職課程コアカリキュラムでは、保育者に求められる不易とされる資質能力として、5 領域の教育内容に関する専門知識を備えた専門性と 5 領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には、幼児を理解する力・指導計画を構想し実践していく力・様々な教材を必要に応じて工夫する力等があげられている<sup>1)</sup>。この「指導計画を構想する」とはどういうことだろうか。保育所保育指針(以下、保育指針と示す)には、「指導計画においては、保育所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。」<sup>2)</sup>、幼稚園教育要領(以下、教育要領と示す)には、「指導計画の作成に当たっては、具体的なねらい及び内容を明確に設定し、適切な環境を構成することなどにより活動が選択・展開されるようにするものとする」<sup>3)</sup>と書かれている。また、文部科学省の「指導計画の作成と保育の展開」では、一般的に考えられている指導計画の作成の手順を図 1<sup>4)</sup>のように示している。つまり、「幼児の実態」と「教師の思い」から具体的な「ねらい」と「内容」を設定、そして「環境の構成」を考え、その「環境に関わって活動する幼児の姿」を予想し、「教師の援助」を考えるという手順である。「指導計画を構想する」とは、この手順に沿って、「幼児の実態」「教師の思い」「ねらい」「内容」「環境の構成」「幼児の姿」「教師の援助」の一つ一つを関連付けながら考えていくことと捉えることができる。

養成校では実習の際に行う責任実習を見越して、保育指導案作成指導を行っている。特に、実習生が最も作成することが多い部分指導案(以下、「指導案」と示す)の指導は、どの養成校でも行っているであろう。しかし、先行研究では、栗岡(2017)は学生が指導案作成に苦手意識をもっており、実際に作成することが苦手であること<sup>5)</sup>を、また、菜原・小林(2017)は指導案を書くことが困難なため、実習そのものが困難になるケースがあること<sup>6)</sup>を指摘しており、指導案作成指導を担当している筆者も同様に感じている。そこで、筆者は学生に対し指導案作成についてわかりやすく取り組めるよう次

の2点を重視して指導している。

1 点目は図1の指導計画作成の手順に従って指導案を作成するように指導することである。指導案作成の出発点は、図1に示す「幼児の実態」と「教師の思い」を含んだ「発達の理解」である。そして、具体的な「ねらい」と「内容」の設定を行い、「環境の構成」を考え、その環境に関わって活動する「幼児の姿」を予想し、「教師の援助」を考えるのである。したがって、指導案の記入項目欄は、「子どもの実態」「ねらい」「内容」「環境の構成」「幼児の姿」「教師の援助」の順に記入するように指導している。

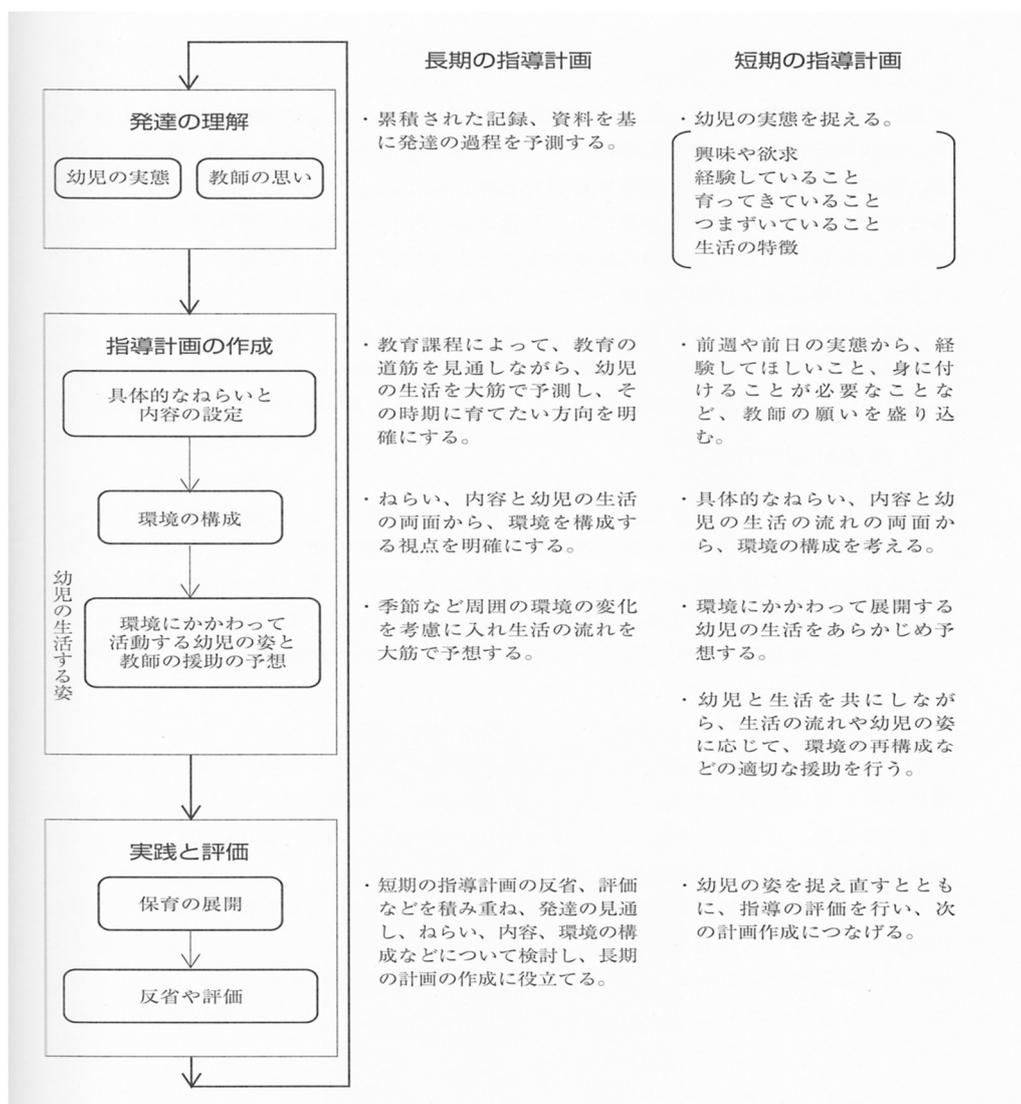


図1：指導計画作成の手順

文部科学省 幼稚園教育指導資料第1集 指導計画の作成と保育の展開 平成25年7月改訂

この手順に従い、学生は、まず、保育対象の子ども年齢・学年をイメージした「幼児の実態」を記入する。次に、自身の「教師の思い」を融合させて「ねらい」と「内容」を考え表現するのだが、この段階でこの手順から逸脱するケースがある。「ねらい」と「内容」は未記入の状態でも自身が考えた手順通りに活動する「幼児の姿」を記入し、そこから、「環境の構成」「教師の援助」もしくは「教師の援助」「環境の構成」、そして、最後に「ねらい」と「内容」を記入するケースである。また、図1の手順に従っているものの、「環境の構成」「幼児の姿」「教師の援助」と「ねらい」「内容」が関連づいていない指導案になっているケースもある。どちらも指導案への記載項目の関連性が意識されず、指導計画としての構想が成り立っていない指導案であると言えよう。

2 点目は、幼児の部分指導案の場合は、「ねらい」を考えた後「内容」を経験しながら「ねらい」達成へと保育が進むように、「内容」は、導入・展開・まとめのそれぞれで考えるように指導することである（図 2）<sup>7)</sup>。その導入・展開・まとめを意識した「内容」に基づき、「環境の構成」「幼児の姿」「教師の援助」を導くのである。「ねらい」は保育の方向目標で、「内容」は「ねらい」を達成するために指導するものであるから、「内容」を「ねらい」の方向に一体的に考えるのである。保育現場では、集団や年齢が違っていても「ねらい」の文章が同じようになる場合があるが、その時には「内容」の記述を見て、保育者がどのようなことを指導したいのか、子どもたちに何を体験させたいのかを理解するのである。「ねらい」と「内容」を図 2 に示すように一体のものとして捉えることが、保育計画を構想する力の獲得への第一歩、ひいては実践力の向上にもつながると考える。

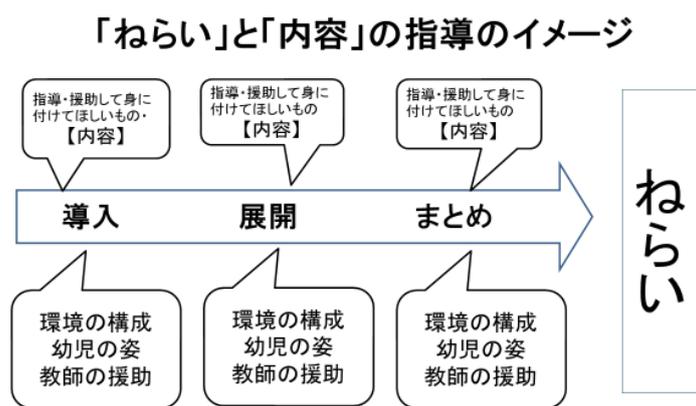


図 2 : 「ねらい」と「内容」の指導のイメージ

しかしながら、筆者は保育現場で多数の実習生を受け入れた経験から、指導案の形式や記入項目の違い、「ねらい」、「内容」の記入内容等も養成校によって様々であることを知っている。では、それぞれの養成校でそれぞれの形式の指導案を使って、どのように「ねらい」と「内容」を指導しているのであろうか。

指導案の作成が困難である学生の状況から、金(2017)は「実践から保育指導案立案」<sup>8)</sup>、栗岡(2017)は「指導案作成を習得するための 3 つの段階と 10 の要点を挙げた段階的・継続的な教授メソッドと授業プラン」<sup>9)</sup>を提案する等、学生の指導案作成のための指導方法の研究は行われているが、養成校における保育指導案作成の指導の実態を調べた研究はない。そこで、本研究では指導計画を構想する場合の要となる「ねらい」と「内容」に着目し、養成校の保育指導案作成の指導の実態について以下の 3 点を明らかにすることを目的とする。

目的 1 : 「ねらい」と「内容」欄の有無

目的 2 : 「ねらい」と「内容」をどのように指導しているか

目的 3 : 指導案作成指導において「ねらい」と「内容」の重要性をどのように考えているか

なお、本研究では養成校の学生が実習先で部分実習を行う際の幼児の部分実習指導案(教育の側面)の作成指導を対象とする。

## II 方法

### 1. インタビュー調査

(1) 調査対象 養成校の幼稚園実習担当者と保育所実習担当者 6 人

(2) 調査期間 2017 年 11 月～2018 年 1 月

### (3) 調査内容

現場での保育・教育経験、養成校教員としての経験年数について尋ねた。そして授業で使用している指導案用紙を見ながら、その指導案に示されたそれぞれの項目（欄）にどのような事項を記入するように指導しているかを尋ねた。

### (4) 倫理的配慮

インタビュー調査に当たっては、研究目的以外にデータを使用しない等を説明するとともに書面に記す等、倫理的配慮を行って実施した。

## 2. アンケート調査

### (1) 調査対象者

近畿の保育者養成校 107 校の教務担当者に調査用紙と返信用封筒を送付し、幼稚園実習担当者と保育所実習担当者に回答をお願いした。

### (2) 調査期間 2018 年 10 月～2018 年 11 月

### (3) 調査内容

インタビュー調査で示された指導案にあったすべての項目、13 項目に「その他」を加えた 14 項目（ア. 実習生の名前 イ. 月日と曜日 ウ. 子どもの年齢・組名・人数 エ. 子どもの実態（子どもの姿・様子等） オ. 主（な）活動 カ. ねらい キ. 内容 ク. 時間（時刻） ケ. 準備物とその選択の理由 コ. 環境構成 サ. 子どもの活動（活動の展開） シ. 保育者の援助（指導上の配慮等） ス. 評価・反省 セ. その他）のそれぞれの項目の有無、どのように指導しているか、また、この 14 項目の中でどの項目に重きをおいて指導しているかについて尋ねた（資料参照）。

本研究では、カ. ねらい キ. 内容 とどの項目に重きをおいて指導しているかを用いた。アンケート調査にあたり、できるだけ多くの回答を得るために記述欄を少なくし、選択肢を選ぶ形式にした。しかし、選択肢作成の参考となる先行研究がないため、選択肢の作成はインタビュー調査の結果を参考にした。選択肢作成上の留意点は次のとおりである。

#### ① 「ねらい」の選択肢の作成

インタビュー調査では、「ねらい」については、既に履修した授業を踏まえて指導していると語った 2 人を含め全員が「心情・意欲・態度を記入するように指導」と語っていたので、「活動を通して育つことが期待される心情・意欲・態度」という選択肢を作成した。また、他の語りから「子どもたちに経験させたいことがら」「子どもたちの育ちに対する思いや願い」という選択肢も加えた。そして、調査の時期が、保育指針、教育要領等の改訂の年でもあったので、「活動を通して育つことが期待される資質・能力」という選択肢も加えた。そこに、「その他」を加え 5 つの選択肢を作った。

#### ② 「内容」の選択肢の作成

インタビュー調査で、「内容」については、「ねらいで育つ姿の具体化であり、活動ではない」と語る教員がいる一方で、「活動内容を書く」「ねらいを達成するための具体的な活動」等、「活動」という言葉を使って説明した教員が 4 人いた。また、活動内容を 1 つ書く、複数書く等、数についての語りがあったことも着目すべき点だと考えた。

これらを踏まえ、内容についての選択肢は、「ねらいを達成するための幼児の主な活動を一つ書く（例：しっぽとりをする）」、「ねらいを達成するための幼児の主な活動を複数書く（例：〇〇体操をする、しっぽとりをする）」、「ねらいを達成するために幼児に経験してほしい心の動き等の内面を書く（例：鬼の動きを意識してしっぽとりを楽しむ）」、「ねらいを達成するための保育者の指導内容を書く（例：しっぽとりのルールを説明する）」に整理した。できるだけ、正確に選択できるように、インタビューで語られたしっぽとりの事例をカッコ内に示した。そして、「その他」を加え「ねらい」と同様 5 つの選択肢を作成した。

(4) 倫理的配慮

調査に際しては、任意回答であること、目的と分析方法、データの管理と公表方法、無記名での実施について文書で説明の上実施した。

### Ⅲ 結果と考察

インタビュー調査については、6 人より提示された 6 枚の指導案の「ねらい」欄と「内容」欄の有無を確認した。今回の研究目的に照らし、逐語録より「ねらい」と「内容」についての語りを整理した。

アンケート調査については、返信があった教員は 60 人であったが、指導案作成指導を行っていない等、処理が難しいと判断された 11 人を除き、49 人を分析対象とした。

(1) 目的 1：養成校の指導案の「ねらい」欄と「内容」欄の有無

① インタビュー調査の結果

「ねらい」欄と「内容」欄の有無の結果は【表 1】である。全員の指導案の形式に「ねらい」欄はあったが、「内容」欄については、5 人が指導案の形式に有りと回答し、1 人が指導案の形式に無いと回答した。

【表 1】：「ねらい」欄の有無

教員名	「ねらい」欄	「内容」欄
A	有	有
B	有	有
C	有	無
D	有	有
E	有	有
F	有	有

② アンケート調査の結果

養成校で使用している指導案の「ねらい」欄と「内容」欄の有無については、【表 2】の結果となった。

「ねらい」の記入欄は 49 人全員（100%）が有ると答えた。

「内容」の記入欄は 6 人（12.2%）が無いと答えた。

【表 2】：養成校で使用している指導案の記載項目

	指導案の記載項目			
	有 (人)	有 (%)	無 (人)	無 (%)
ねらい	49	100.0	0	0.0
内容	43	87.8	6	12.2

また、「内容」欄がない理由の内訳は【表 3】の通りで「学校の様式だから」が 5 人、「実務経験になかった」が 1 人、「主な活動で書くから」が 1 人だった。

【表 3】：「内容」がない理由

項目	選択者数 (複数回答可)
「内容」は必要ないと考えているから	0
自分の実務経験においては書かなかったから	1
学校の様式として決まっているから	5
他の項目 ( ) で書くから	1 主な活動
その他 ( )	0

③ 考察

インタビュー調査対象者 6 人が使用している指導案のすべてに「ねらい」欄があり、「ねらい」欄の有無についての語りは全く聞かれず、全員が「ねらい」欄の存在を前提として語っていたと考えら

## 養成校における保育指導案作成に関する研究

れる。アンケート調査においても49人全員が「ねらい」欄のある指導案を使用していたのは、インタビュー調査から予想された結果であった。指導案として、何のために、どうしてその活動をするのかを明確に示しておく「ねらい」欄が必要であると考えるのは当然であろう。「ねらい」の指導では、「心情・意欲・態度」という言葉が教員のなかで定着していることが伺われた。

「内容」欄についてはインタビュー調査では6人中5人(83.3%)が「内容」欄のある指導案を使用していた。アンケート調査では「内容」欄のある指導案は49人中43人(87.8%)が使用していた。田中・安東(2015)は、「内容欄がある保育指導案は一部の保育者養成校で採用されるにとどまっている」<sup>10)</sup>と指摘しているが、これについては、一部ではなく85%前後という多くの保育者養成校の教員が使用していることが分かった。一方で15%前後の教員は「内容」欄のない指導案を使って指導案作成指導を行っていることが分かった。「内容」欄がない理由【表3】の結果から、それ以前の形式を踏襲して指導案作成の指導がなされていることが推察できる。それは、平成元年の教育要領改定、平成20年の保育指針改定以前からある「ねらい」と比べ、そこで新たに示された「内容」は必要とは考えているが、指導案に反映する必要性を十分に感じていないからではないだろうか。

(2)目的2:「ねらい」と「内容」をどのように指導しているか

### ①インタビュー調査の結果

「ねらい」と「内容」についてのインタビューでの語りを整理したものが【表4】である。「ねらい」については、6人全員が「心情・意欲・態度を記入するように指導」と語った。

【表4】:「ねらい」と「内容」の指導についての語り

教員名	「ねらい」の指導についての語り	「内容」の指導についての語り
A	心情・意欲・態度	保育士がすることも記入 保育内容とねらいを達成するための具体的な活動
B	心情・意欲・態度	保育内容(保育者がすることも記入)
C	心情・意欲・態度	内容欄はない 内容とは指導案の中にすべてあらわれてくる具体的なものだから、敢えて書きだすことはない
D	心情・意欲・態度 子どもたちに育ててほしいもの	活動ではない ねらいのこの育てたいという幼児の姿に今日は何をもって味わわせるか、楽しませるか等を具体化していくもの
E	心情・意欲・態度 子どもたちに経験してほしいこと	活動内容を1つ書く
F	心情・意欲・態度 子どもの育ちに対して思いや願い	主要な活動だけを複数を書く

「内容」については、「ねらいで育つ姿の具体化であり、活動ではない」と語る教員(D)がいる一方で、「活動内容を書く」「ねらいを達成するための具体的な活動」等、「活動」という言葉を使って説明した教員が4人(A,B,E,F)いた。また、活動内容を1つ書く、複数書く等、数についての語りがあった。

「内容」欄のない指導案を使用している1人(C)は、「内容とは指導案の中にすべてあらわれてくる具体的なもの。だから、敢えて書きだすことはないと思っている」と語った。そして、その教員(C)の指導案には「主な活動」という記入欄があり、そこへ活動内容を1つ書くように指導してい

た。このことから、C 教員と E 教員の場合は、記入欄の名称は「主な活動」「内容」と違うが、活動内容を同じように 1 つ書く欄があることがわかった。6 人へのインタビュー調査であったが、回答は様々であった。

③ アンケート調査の結果

「ねらい」の指導については【表 5】の結果となった。「ねらい」については、「活動を通して育つことが期待される心情・意欲・態度」という回答が最も多く、49 人中 42 人 (85.7%) が選択していた。次に多かったのが、「子どもたちの育ちに対する思いや願い」であった。選択肢のうち「子どもたちに経験させたいことがら」と「子どもたちの育ちに対する思いや願い」という 2 つの選択肢は、インタビュー調査結果【表 4】から作成したものである。「子どもたちに経験させたいことがら」は 18 人

(36.7%)、「子ども  
の育ちに対する思  
いや願い」は 26 人  
(53.1%)が選択して  
いた。

その他の回答で  
は、「当該領域の特  
性に関すること」

「5 領域 10 の姿よ  
り」「領域内容より」と領域を意識した回答が多かった。

複数回答可能だったので、教育要領、保育指針で示された「心情・意欲・態度」「資質・能力」という選択肢と「子どもたちに経験させたいことがら」「子どもたちの育ちに対する思いや願い」という具体的な表現(以下、「具体的な表現」と示す)に分け、選んだ選択肢の組み合わせを見ると【表 6】になった。

【表 5】:「ねらい」をどのように指導するか (複数回答可)

選択肢	選択者数 (人)	%
心情・意欲・態度	42	85.7
資質・能力	17	34.7
子どもたちに経験させたいことがら	18	36.7
子どもたちの育ちに対する思いや願い	26	53.1
その他	5	10.2

【表 6】: 選択肢の組み合わせ

選択肢	選択者数 (人)	%
要領・指針のみ	15	30.6
具体的な表現のみ	3	6.1
要領・指針+具体的な表現	27	55.1
要領・指針+その他	3	6.1
具体的な表現+その他	1	2.0
合計	49	100

「具体的な表現のみ」を選んだ 3 人、「具体的な表現とその他」を選んだ 1 人を除く 45 人は教育要領、保育指針等に示された言葉である「心情・意欲・態度」「資質・能力」のどちらか、または両方を選んでいった。

「内容」については【表 7】の結果となった。「内容」では「ねらい」の「心情・意欲・態度」のように多くの教員の支持を得る選択肢はなかった。最も多い「ねらいを達成するために幼児に経験してほしい心の動き等の内面」でも 22 人と内容欄のある指導案を使用している 43 人の半数であった。

また、その他の回答は、「ねらいを達成するためにどのような経験をしてほしいかを考えて書く」「ねらいを達成するために保育者が指導し子どもが主体的に環境にかかわって経験すること」「ねらいの達成をすべく選んだその内容の特徴的内容」等であった。

【表 7】：「内容」をどのように指導するか（複数回答可）

選択肢	選択者数（人）	%
ねらいを達成するための幼児の主な活動を1つ書く	18	41.9
ねらいを達成するための幼児の主な活動を複数書く	18	41.9
ねらいを達成するために幼児に経験してほしい心の動き等の内面を書く	22	51.2
ねらいを達成するための保育者の指導内容を書く	5	11.6
その他（ ）	6	14.0

複数回答可能だったので、「ねらいを達成するための幼児の主な活動を1つ書く」「ねらいを達成するための幼児の主な活動を複数書く」の活動を書くという選択肢（以下、「活動」と示す）と「ねらいを達成するために幼児に経験してほしい心の動き等の内面を書く」（以下、「心の動き」と示す）と「ねらいを達成するための保育者の指導内容を書く」（以下、「指導内容」と示す）に分け、選んだ選択肢の組み合わせを見ると【表 8】になった。「内容」は、「ねらい」とは反対に「活動のみ」「心の動きのみ」「その他のみ」と一つだけ選んでいる人が31人（72.1%）であり、複数を組み合わせている人が少なかった。

【表 8】：選択肢の組み合わせ

選択肢	選択者数（人）	%
活動のみ	17	39.5
心の動きのみ	10	23.3
その他のみ	4	9.3
活動+心の動き	5	11.6
心の動き+その他	1	2.3
活動+心の動き+指導内容	5	11.6
活動+心の動き+指導内容+その他	1	2.3
合計	43	99.9

### ③考察

「ねらい」については、インタビュー調査、アンケート調査共に「活動を通して育つことが期待される心情・意欲・態度」という回答が最も多かった。つまり、ほとんどの人が国の方針、国が示す言葉を重視して指導していることを示している。

また、教育要領・保育指針に加え「具体的な表現」を選んだ人が27人（55.1%）と半数以上いることから、国の方針、国が示す言葉を重視してはいる。しかし、「心情・意欲・態度」「資質・能力」という言葉は抽象的で理解が難しく、教育要領・保育指針の言葉に加え、「子どもたちに経験させたことがら」「子どもたちの育ちに対する思いや願い」という具体的な表現を用いて、「ねらい」を指導しようとしていると推察する。その中でも「子どもたちの育ちに対する願いや思い」を選じた人が26人と半数を超えていたのは、文部科学省の指導案作成の手順（図1）に示されている「教師の思い」を意識しているからではないかと考える。平成元年の教育要領、平成2年の保育指針で示された「ねらい」は「心情・意欲・態度」という考え方が、30年を経て浸透、定着していることを示しているだろう。

一方、平成30年の教育要領・保育指針で示された「資質・能力」を選んだ人はこの4つの選択肢

のなかでも最も少なく、17 人 (34.7%) だった。ねらいは「資質・能力」という考え方は、まだ意識されていない、または「資質・能力」をどう捉え理解するかについても明確になっていない段階だと考えられる。

「内容」の指導については、「ねらい」と比較して、インタビュー調査においても、アンケート調査においても多様な捉え方があった。

今回の調査の結果から、「内容」はそれぞれの教員がそれぞれの理解で指導していると推察される。そして「内容は活動」と捉えている回答が多かった。文部科学省は「内容とは幼児の発達に応じて適切な指導を行うために、その時期に必要な経験を捉えることであり、幼児の活動の羅列ではありません」<sup>11)</sup>と記している。しかし、今回の調査結果からこのような考え方は浸透、定着していないと言えるだろう。この背景には、教育要領・保育指針等での「内容」についての記載があると考えられる。「内容」は、教育要領では「ねらいを達成するために指導する事項」<sup>12)</sup>、保育指針では、『「ねらい」を達成するために…中略…保育士等が援助して子どもが環境にかかわって経験する事項』<sup>13)</sup>とある。しかし、この「事項」という言葉は活動、心の動き、指導内容等、様々に解釈できる曖昧な言葉だと思われる。具体的に何を表すかについては、読み手一人一人に委ねられており、そのことが、内容は活動である、活動ではなく心の動き等の内面である等の様々な捉え方を生んでいるのだろう。

(3) 目的 3：指導案作成指導において「ねらい」と「内容」の重要性をどのように考えているか

この質問はインタビュー調査では行わず、アンケート調査の質問用紙作成の際に追加した項目である。アンケート調査では、指導案の 14 の記載項目のうち指導に重きを置く項目について、1 位から 3 位までの順位を回答してもらい、1 位を 3 点、2 位を 2 点、3 位を 1 点として順位点を合計した結果のうち、特に図 1 の指導計画の構想に関わる 8 項目を【表 9】に示した。

① アンケート調査の結果

指導に重きを置く項目 1 位に挙げている人が最も多く、順位点も最も高かった項目は「ねらい」だった。2 番目に順位点が高かった「保育者の援助」と比べても 20 点近くの差があり、指導案作成においては「ねらい」が大切であると考えている教員は多かった。またそれに続き、「保育者の援助」、「子どもの活動」、「環境構成」の順に重きが置かれていることが分かった。

【表 9】：指導案作成指導において重きを置く項目

選択肢	1 位	2 位	3 位	選択者数 合計 (人)	順位点
子どもの実態 (子どもの姿・様子等)	6	3	1	10	25
主な活動	0	0	3	3	3
ねらい	21	7	7	35	84
内容	0	7	3	10	17
環境構成	1	12	10	23	37
子どもの活動 (活動の展開)	10	8	4	22	50
保育者の援助 (指導上の配慮等)	10	10	16	36	66
評価・反省	0	1	1	2	3

「内容」を 1 位に挙げた人はおらず、2 位、3 位を足しても 10 人、順位点 17 点と「評価・反省」、「主な活動」、に次いで少なく、「内容」を重視している人が少ないことが分かった。

② 考察

「ねらい」と「内容」を図 1 のように一体的に考えるものとしているならば、「ねらい」と同様に「内容」は重視されるべき項目であろう。「ねらい」と「内容」の順位点が大きく違うことは、指導

案を作成する、つまり指導計画を構想するときに、「内容」は必要不可欠な項目とは考えられていないと推察できる。「ねらい」と「内容」という項目は、教育要領や保育指針に示されているから必要と考えてはいるが、指導計画を構想する中での「内容」の捉え方が教員の中で明確になっていないことが考えられる。そして、養成校において、「ねらい」と「内容」は一体的に考える(図1)のではなく、別々のものとして指導されている可能性があると言える。

## V 総合考察

養成校では、保育者に求められる資質能力の一つとしての指導計画を構想し、実践していく力を育てるために、保育指導案作成指導が行われている。養成校での保育指導案作成指導の実態を知るべく、幼児の部分実習指導案(教育の側面)作成について、「ねらい」と「内容」に着目し、それぞれの指導内容や「ねらい」と「内容」の捉え方について指導教員へのインタビュー調査、アンケート調査を行った。その結果、インタビュー調査、アンケート調査ともに全ての教員が使用している指導案に「ねらい」欄があり、インタビュー調査では83%、アンケート調査では85%以上の教員が使用している指導案に「内容」欄があることが分かった。そして、インタビュー調査では100%、アンケート調査では85%以上の教員が「ねらい」を「心情・意欲・態度」と指導していた。しかし、「内容」については、インタビュー調査、アンケート調査ともに「主な活動」「心の動き」「子どもが経験すること」等と指導内容に違いがあった。また、指導案の記入欄の中では、「ねらい」の指導は重視しているものの、「内容」の指導には重きが置かれていなかった。

これらのことから、養成校における保育指導案作成について以下の2点について検討の余地があるのではないかと考える。

1点目は「内容」とは何かという「内容」の捉え方についてである。田中・安東(2015)も「内容に何を記述したらよいかかわからない。」<sup>14)</sup>と指摘している。今回の調査では、「内容」の捉え方が教員によって様々であることが分かった。養成校での指導が様々であるから、現場の保育者の捉え方も様々であることは予想できる。教育要領解説では、「それ(ねらい)を達成するために教師が幼児の発達の実情を踏まえながら指導し、幼児が身に付けていくことが望まれるもの(筆者追記)」<sup>15)</sup>、保育指針解説では「それ(ねらい)を達成するために保育士等が子どもの発達の実情を踏まえながら援助し、子どもが自ら環境に関わり身に付けていくことが望まれるもの(筆者追記)」<sup>16)</sup>としている。若干の違いはあるが、保育者が指導、援助し、子どもが身に付けていくことが望まれるものとしてほぼ共通理解できるのではないだろうか。『「ねらい」は「心情・意欲・態度』』のように、例えば、『「内容」は「子どもが身に付けていくもの』』と保育にかかわる人たちが共通理解しやすい表現があれば、今後、指導教員の「内容」の捉え方の違いが小さくなるのではないかと。そして、そのことは、学生の指導計画を構想する力の育成につながっていくのではないだろうか。

2点目は「ねらい」と「内容」の関連についてである。今回の調査結果では、指導案作成指導の重きを置く項目として「ねらい」と「内容」に大きな差が見られた。そのため、「ねらい」と「内容」は別々のものとして指導されている可能性があると考えられる。「指導計画を構想する」という点に着目すると、「内容」は「ねらいを達成するために指導する事項」<sup>17)</sup>、『「ねらい」を達成するために…中略…保育士等が援助して子どもが環境にかかわって経験する事項』<sup>18)</sup>であるから、「ねらい」と「内容」は本来、一体的に考えられるものであろう。しかし、今回の調査では「ねらい」と「内容」のそれぞれの項目についての質問は行ったが、「ねらい」と「内容」の関連についての質問を設定しなかったため、その関連についてどのように考えられているかは明らかにできなかった。今後「指導計画を構想する」うえで「ねらい」と「内容」の関連について検討していくことは、養成校の学生が指導計画を構想する基礎的な力をつけるうえで、有効な手段となり得るのではないだろうか。

学生がもっとも多く作成する部分指導案において、「幼児の実態」と「教師の思い」から「ねらい」と「内容」を一体的に考えること、その考えた「ねらい」「内容」と「環境の構成」「幼児の姿」

「教師の援助」の各項目を関連させて考えていく積み重ねが、指導計画を構想する力、ひいては半日の指導計画、全日の指導計画、週、月、期、年の指導計画を構想する力を育てることになるのではないかと考える。

#### 謝 辞

本研究のインタビュー調査、アンケート調査にご協力くださった養成校の先生方に深く感謝申し上げます。また、本研究の方向性を示してくださり、ご助言を賜りました兵庫教育大学 石野秀明教授、アンケート調査の分析についてご助言を賜りました園田学園女子大学短期大学部 中見仁美准教授に厚く御礼を申し上げます。

#### 付 記

本調査は 2018 年度幼年教育実践学会研究奨励金によるものであり、本論文は 2019 年 9 月 16 日の幼年教育実践学会の発表を加筆、修正したものである。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会 (2017) 平成 28 年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える— P4
- 2) 厚生労働省 保育所保育指針<平成 29 年告示> P13
- 3) 文部科学省 幼稚園教育要領<平成 29 年告示> P14
- 4) 文部科学省 幼稚園教育指導資料第 1 集 指導計画の作成と保育の展開 平成 25 年 7 月改訂 P29
- 5) 栗岡洋美 (2017) 指導案作成の教授メソッド—段階的指導のありかた—、中京学院大学中京短期大学部研究紀要第 47 巻第 1 号 P21
- 6) 菜原桂子・小林美花 (2017) 幼稚園教育実習・保育所実習における指導案の現状と課題、北翔大学短期大学部研究紀要第 55 号 P139
- 7) 林理恵・向井妙子・森晴美 (2019) 『養成校における保育指導案作成に関する研究—「ねらい」「内容」に着目して—』幼年教育実践学会発表資料改訂
- 8) 金瑛珠 (2017) 保育・教育課程を学ぶ授業における指導案指導のあり方についての一考察—順序性について考える—、未来の保育と教育—東京未来大学保育・教職センター紀要—第 4 号 P55
- 9) 前述 5)
- 10) 田中敏明・安東綾子 (2015) 保育指導案の形式と内容に関する考察—保育指導案の統一の必要性—九州女子大学紀要 第 52 巻 2 号 P121
- 11) 文部科学省 幼稚園教育指導資料第 1 集 指導計画の作成と保育の展開 平成 25 年 7 月改訂 P45-46
- 12) 前述 3)
- 13) 前述 2)
- 14) 前述 10)
- 15) 文部科学省 幼稚園教育要領解説 平成 30 年 3 月 P143
- 16) 厚生労働省 保育所保育指針解説 平成 30 年 3 月 P87
- 17) 前述 3)
- 18) 前述 2)

**資料**

③あなたが担当する授業で、部分実習の保育指導案の作成指導について、お尋ねします。

問 6. 部分実習の保育指導案（幼稚園）の項目をすべてお答えください。

- |                      |                  |                 |
|----------------------|------------------|-----------------|
| ア. 実習生の名前            | イ. 月日と曜日         | ウ. 子どもの年齢・組名・人数 |
| エ. 子どもの実態（子どもの姿・様子等） | オ. 主（な）活動        | カ. ねらい          |
| キ. 内容                | ク. 時間（時刻）        | ケ. 準備物とその選択の理由  |
| コ. 環境構成              | サ. 子どもの活動(活動の展開) |                 |
| シ. 保育者の援助（指導上の配慮等）   | ス. 評価・反省         | セ. その他（ ）       |

★問 7～9 の質問は、幼児を対象にした部分実習の保育指導案(教育の側面)についての質問です。

問 7. 部分実習の保育指導案（幼稚園）の「ねらい」と「内容」の項目をお答えください。

ねらい	内 容
7-1. ①あなたが指導している保育指導案に「ねらい」を記入する欄はありますか。  ア. ある(7-2へ)    イ. ない(7-1②へ)	7-7. ①あなたが指導している保育指導案に「内容」を記入する欄はありますか。  ア. ある(7-8へ)    イ. ない(7-7②へ)
②「ねらい」の欄がない理由をお答えください。  ア. 「ねらい」は必要ないと考えているから イ. 自分の実務経験においては書かなかったから ウ. 学校の様式として決まっているから エ. 他の項目（ ）で書くから オ. その他（ ）	②「内容」の欄がない理由をお答えください。  ア. 「内容」は必要ないと考えているから イ. 自分の実務経験においては書かなかったから ウ. 学校の様式として決まっているから エ. 他の項目（ ）で書くから オ. その他（ ）
7-2. 「ねらい」をどのように指導していますか。 （複数回答可） ア. 活動を通して育つことが期待される 心情・意欲・態度 イ. 活動を通して育つことが期待される 資質能力 ウ. 子どもたちに経験させたいことから エ. 子どもたちの育ちに対する思いや願い オ. その他（ ）	7-8. 「内容」をどのように指導していますか。 （複数回答可） ア. ねらいを達成するための幼児の主な活動を 一つ 書く（例：しっぽとりをする） イ. ねらいを達成するための幼児の主な活動を 複数書く （例：〇〇体操をする しっぽとりをする） ウ. ねらいを達成するために幼児に経験して ほしい心の動き等の内面を書く

	<p>(例：鬼の動きを意識してしっぽとりを楽しむ)                  工. ねらいを達成するための保育者の指導内容                  を書く (例：しっぽとりのルールを説明する)                  オ. その他 ( )</p>
<p>7-4.                  「ねらい」の指導で、学生の実態に起因する                  難しさとして当てはまるものについて 1 位                  と 2 位の項目を選んで教えてください。                  1 位 [ ]、 2 位 [ ]                  ア. 「ねらい」として書きたいことがイメー                  ジできているが、適切な文章で表現でき                  ない                  イ. 「ねらい」を考える上で根拠となる子ど                  もの具体的な姿をイメージしにくい                  ウ. 「ねらい」を考える上で根拠となる保育                  者としての思いや願いをもちにくい                  エ. 「ねらい」の考え方が理解できず、何を                  書いてよいのかわからない                  オ. その他 ( )</p>	<p>7-10.                  「内容」の指導で、学生の実態に起因する難し                  さとして当てはまるものについて 1 位と 2 位                  の項目を選んで教えてください。                  1 位 [ ]、 2 位 [ ]                  ア. 「内容」として書きたいことがイメージでき                  ているが、適切な文章で表現できない                  イ. 「ねらい」と「内容」の違いがわからない                  ウ. 「内容」の考え方が理解できず何を書いてよ                  いのかわからない                  エ. その他 ( )</p>

問 9. あなたは、部分実習の保育指導案（幼稚園）のどの項目に重きをおいて指導をしていますか。

1 位から 3 位の項目をお答えください。

1 位 ( ) 2 位 ( ) 3 位 ( )

[選択肢]

- |                      |                  |                 |
|----------------------|------------------|-----------------|
| ア. 実習生の名前            | イ. 月日と曜日         | ウ. 子どもの年齢・組名・人数 |
| エ. 子どもの実態（子どもの姿・様子等） | オ. 主（な）活動        | カ. ねらい          |
| キ. 内容                | ク. 時間（時刻）        | ケ. 準備物とその選択の理由  |
| コ. 環境構成              | サ. 子どもの活動（活動の展開） |                 |
| シ. 保育者の援助（指導上の配慮等）   | ス. 評価・反省         | セ. その他 ( )      |